

横浜

Yokohama Renaissance

横浜 ルネサンス



Number 16

特集

ヨコハマを読む

Who's Who in YOKOHAMA

植田 淳さん

N.U.

ごあいさつ

横浜信用金庫理事長

斎藤 寿臣

『横浜ルネサンス』第16号をお届けします。『横浜ルネサンス』は、当金庫の創立80周年記念事業の一環として、2002年10月に創刊しました。当初は年1回の発行でしたが、2006年から春と秋の年2回発行となっています。

本号では、特集「ヨコハマを読む」と題して、さまざまな視点から横浜の街の魅力を読み解く方々を取りました。

WHO's WHO in YOKOHAMAでは、協同組合伊勢佐木町商店街副理事長である植田淳さんと、ジェリービーンズコンサートの常連で大規模な野外コンサートを10月17日(日)に控えるフォークデュオ、N.U.をご紹介しました。

第9回「横浜の聴き方」では、マルシアの『ふりむけばヨコハマ』を取り上げています。

『横浜ルネサンス』第16号、お楽しみいただければ幸いです。

表紙撮影：矢部志保

A Table of Contents

横浜絵解き図絵	2
目次／理事長挨拶	3
特集 ヨコハマを読む	
	高橋清一 ホテルニューグランド名誉料理長 4
	『横浜流』のすべては歴史ホテルから始まった 陳天璽 国立民族学博物館准教授 6
	獅子舞の向こうにきたるべき理想社会を読む 大家博紀 (財)放送番組センター 8
	所蔵番組から読み解く昔のヨコハマ映像 勝見洋一 エッセイスト 10
	開港の時代を凝縮した森鷗外作詞の横浜市歌 田中健介 会社員 ブロガー 12
	横浜限定のブログから生まれた単行本 桜井飛鳥 東海大学大学院生 14
横浜を詠む 水原紫苑 写真：矢部志保 16	
Who's Who in YOKOHAMA	
	植田淳 協同組合伊勢佐木町商店街副理事長 18 目指すは「横浜野音」「クロスストリート」を音楽のメッカに
	N.U. 20 母なる横浜の地で夢の野外フェス
横浜の聴き方 第9回 中島久 22 『ふりむけばヨコハマ』マルシア	
横浜ジェリービーンズ倶楽部通信 23	

◎横浜絵解き図絵



資源の豊かな日本だが、ミネラルウォーターの2008年度(H20)の1人当たり国内消費量は19.7ℓ／年だった。これは、世界でもっともミネラルウォーターを消費するイタリアの約10分の1だ。ミネラルウォーターは、昭和初期にホテル用の商品が販売され、昭和40年代には、ウイスキーの水割り用として飲食店向けに販売されるなど、もともと業務用が中心の商品だった。1983年(昭和58)に家庭用の商品として販売されて以降、ミネラルウォーターの市場は徐々に拡大していき、現在にいたっている。おいしく、安全、安心な水を飲みたいとする需要が、ミネラルウォーターの市場を拡大させたと見られる。

しかし、2009年(平成21)の全国におけるミネラルウォーターの輸入実績は、輸入数量が418,972Kℓ(対前年比16.2%減)、輸入金額が260億6百万円(同23.7%減)で、数量、金額ともに2年連続して減少した。横浜港においても、同年の輸入数量が120,180Kℓ(対前年比33.6%減)、輸入金額が81億32百万円(同33.8%減)となった。

業界では、ミネラルウォーターの輸入について、もともと水という商品は、水道水で代替できるもので、景気の低迷に伴う節約志向もあって2008年および2009年の輸入は前年比で減少となつたとみている。その一方で国内のミネラルウォーターの需要は、堅調に推移していることや、ミネラルウォーターは主に都市部で消費されていて、まだ地方にまでは需要の広がりをみせていないところ

ミネラルウォーターの国内生産量及び輸入量の推移



横浜港の輸入実績推移



から、ミネラルウォーター市場自体は伸びる余地があり、今後景気が回復していくれば、増加する要素はあるとみている。

ところで、横浜は、わが国最初の近代水道発祥の地。英国人技師のヘンリー・スペンサー・パマー(1838-1893)を顧問に、1885年(明治18)に近代水道の建設に着手し、1887年(明治20)10月17日に給水が開始された。

戸数わずか87戸の小さな漁村だった横浜は、1859年(安政6)に開港すると、人口は日増しに増加し、市街は急激に発展した。当時住民は、水を求めて井戸を掘ったが、横浜は海を埋め立てて拡張してきたため、良質な水に恵まれず、ほとんどの井戸水は塩分を含み、飲み水には適していなかったこと、当時世界的に伝染病が流行していて公衆衛生上の対策をする必要があったことなどが近代水道建設の背景にあったようだ。

ホテルニューグランドといえど、横浜の震災復興のシンボルであり、ホテル文化発祥の地であり、洋食文化発祥の地でもある。「ニューグランド」と、ホテルをつけずに呼ぶ人もいる。ニューグランドはホテルの代名詞だからだ。ダグラス・マッカーサーが使用したマッカーサーズスイート、大佛次郎の鞍馬天狗の間。石原裕次郎や松田優作が訪れ、サザンオールスターズの曲にも歌われたバー「シーガーディアンズ」も有名だ。

そのニューグランドの洋食文化を守り、伝承しているのが、四代目総料理長、現在は名誉料理長を務める高橋清一さんだ。2005年出版の著書『横浜流』はここから始まった。(東京新聞出版局刊、以下『横浜流』)は、2003年から1年間、東京新聞神奈川版に連載されたコラム「厨房鉛筆」を1冊にまとめたものだ。ベースになったのは高橋さんのメモ。歴史、料理、食材、お酒、マナー、調理場や客室で見聞きした話を高橋さんはこまめに書き留めていた。「好奇心がそうさせた」のだという。「好奇心は大切ですよ。それを持たなければ人は成長しません」。

共感し訪れる読者が後を絶たない
歴史はホテルニューグランドにあり

中学時代、高橋さんは大和市の自宅から砂利道を自転車で1時間かけて横浜に通つた。そして、山下公園の柵に腰掛け二ニューグランドに出入りする人を好奇心で眺めていた。その好奇心が、22歳で会社員を辞め、ニューグランドに直談判での入社を試みるエネルギーにつながった。

そんな高橋さんの本だから『横浜流』には全編にわたってニューグランドへの想いが溢れている。当然のことながら、想いは読者に伝わり、多くのファンレターが寄せられた。そして全国から読者がニューグランドを訪れるようになった。

たとえば……。茨城県の96歳の老婦人は娘の嫁いだ地の物語として、『横浜流』を読んだ。感激し、町内や友人に回覧した。しかし、本は行方不明になってしまった。やがて、その母娘は憧れのニューグランドに念願の宿泊を果たす。だが、残念ながら著者の高橋さんは会うことができなかつた。

後でそのことを知った高橋さんは、すぐ手紙を書き、サイン本を老婦人宛に贈つた。老婦人は「宝物が戻ってきた。もう死んでも良い程に嬉しい」と大喜び

良いサービスと料理を心に残すため
ニユーグランドに入社後の高橋さんの道は険しかつた。皿洗い6年、鍋洗い8年。包丁を持つ頃には37歳になつていた。しかし、人より長い下積み経験とサラリーマン時代に覚えた在庫管理技術が調理場の改革に役立つた。

肉や魚の下ごしらえ係になつた時には、料理素材の鮮度・品質の厳しい見極めと仕入れ、在庫の正確なコントロールを図り、料理の原価率を劇的に下げた。

さらに上下関係が厳しすぎた調理場の雰囲気を変えた。1999年の総料理長就任は、人の和を重んじて調理場のコミュニケーションを図つたのが選任の理由だ。『みんな仲良しでないと美味しい料理は作れないと思ってね』と高橋さんは振り返る。

2007年に名譽料理長となつても、率先して料理人の輪に入り盛りつけやエビの皮むきもする。料理長といえどもデスクに座らず一緒に汗を流すのは初代料理長サリー・ワイルから良き伝統だ。

「料理もサービスも、心です。良いものは、お客様の心に残ります。『横浜流』も、心がテーマ。人の思いやりや優しさを感じいただきたい」。高橋さんは穏やかな笑顔で調理場へ戻つていつた。

高橋清一さん



「横浜流」のすべてでは歴史ホテルから始まつた

たかはしせいいち ホテルニューグランド名誉料理長。1942年大和市生まれ。高卒後、大手精肉店メークー総務課にて勤務。7年より現職。趣味は登山。

国立民族学博物館准教授

陳天璽さん

獅子舞の向こうに きたるべき理想社会を読む



人類学者として、華僑二世として

「私は、横浜大好きですから」。

一週間を大阪と横浜で半分ずつ過ごすという陳天璽さんは、東西を往復する生活の大変さを問われると、笑みを浮かべながらそう答えた。

大阪での生活は、千里にある国立民族学博物館で華僑のネットワークの実態を研究する文化人類学者として。横浜での生活は、中華街の地久門前の華都飯店を拠点に暮らす華僑一世として。

中国大陸から台湾での生活を経て日本に渡つて来た親の六番目の子として横浜で生まれた陳さんが横浜に向ける眼差しは複眼的だ。

「横浜で生れたのですから、この街にも日本にも愛着はあります。でも、この国では国籍の有無を問い合わせ、人を平等に扱わない。納税義務はあるのに、社会保障、教育、選挙権などで不利益を受ける。外国人登録証を持たされ、差別に遭い、アイデンティティを失いかける」。

陳さんが21歳の時のことだ。両親と共に訪れた台湾で入国を拒否された。失意の中、帰国した日本でも危うく入国を拒否されそうになった。理由はただひとつ。陳さんが「無国籍」だったから。

「無国籍」経験から学んだこと

陳さんにとうて、21歳の春のこの出来事は大きな衝撃だった。この時から、無国籍や華僑を巡る陳さんの長い旅が始まる。筑波大学から香港中文大学、続いてハーバード大学へ留学し、無国籍や華僑の研究に取り組んでいった。その根幹にあるのは「私は何人か」という問い合わせだった。

研究を通して見えてきたのは、私たち「國」という枠の中に入れられがちだということだった。「國民」あるいは「外人」と、國で境界を引くことで、アイデンティティを形成することや、人がカテゴライズされがちになるということだった。

グローバル化によって移動・移住が頻繁に行われている。ILLOの調査によれば世界の60人に1人が移動や移住している。陳さんはそんな時代なのに、「國々や人々の視点は移動する人たちに追いついてない」と主張する。

「そのため、国籍法などから矛盾が出て、無国籍の人が生まれる」。

陳さんは、自己の体験から、無国籍の人々が発生しない社会、無国籍の人が他の国民と同じように人間として平等に扱われるような社会が実現することを夢見ている。それは実現可能なのか？

横浜中華街に見出す横浜の可能性

「見えない差別は存在します。その存在は、その立場に置かれて初めて気づくのです」。こう語る陳さんは、自分と同じ境遇にある人々を支援する無国籍ネットワークを発足させている。問題の存在に光をあて、無国籍者が自立的に生き道を模索する活動を支援している。

こうした具体的な支援活動の一方で、微妙な街の変化。人々の意識の変化も感じているという。

「街のために」「共同体のために」という意識が差別を越え始めている。たとえば、今、中華街一番の獅子舞の踊り手は日本人の子どもですかね？」

華僑の友だちと遊び、春節や関帝誕のお祭りを見て育つうちに、獅子舞に憧れ、夢中になつた結果だそうだ。開港都市・横浜は移動や移住とともになう出会いに寛容とされてきたこともあるかもしれない。

「誰が華僑で、誰が日本人かを区別するよりも、自分たちが街を作っているのだ」という意識。出自に関係なく、この街で生きていくという意識。そうした意識が、時代の移ろいとともに、未来の中華街を、ひいては未來の横浜をつくっていくでしょう」と陳さんは街の可能性を読んだ。

リニューアルした視聴情報システム
みなとみらい線日本大通り駅に直結する横浜情報文化センター内にある放送ラジオブリーチーは、日本放送協会（NHK）と民放各社が設立した財団法人放送番組センターが運営する。放送番組を保存・公開する専門施設だ。つまり本のようないくつかの資料ではなく、映像や音声の資料に特化した図書館といえるだろう。これまでもに保存した番組数はテレビ、ラジオ、CMなど約2万4000本。このうち約2万本を視聴システムで楽しめる。

放送ライブラリーが現在の施設で開館したのは2000年10月。今年、当初の視聴システムが一新され、従来よりも使いやすいシステムで番組視聴が可能になった。「ここ数年の課題でしたが、この7月にようやくリニューアルにこぎつけました」。落ち着いた声で語る大家博紀さんだが、表情は嬉しさと誇らしさに満ちている。

大家さんはもともとはシステム開発をする企業に勤めていた。そこで放送ライブラリーのシステムを担当するうちに担当たという大家さんである。感慨ひとしおといったところだろう。

リニューアルした視聴情報システム

立地の関係上、横浜を中心とした県内からの来訪者が多いようだ。来場者数は1日平均300人強。年間では約10万人。その大半は実際に番組を視聴できるという魅力に引き寄せられる一般来場者だ。

夏休みには「アナウンサー体験教室」「DJ体験教室」など手軽に放送体験ができるイベント企画もありメディアアリテラシー教育で利用する小中学校生の利用も多い。

全国から横浜へ人を呼び寄せる魅力

企画イベントへの参加申し込みが多いのも放送ライブラリーの特徴ではないかと大家さんはいう。

「放送業界関係者でつくる放送人の会」との共催イベント『名作の舞台裏』「人気番組メモリー』などでは、俳優が出演することもあるほか、200席に対して毎回数千人の参加申し込みが全国から寄せられます」。

つまり、横浜への来訪者の増加にもつながっているということだ。

「運営主体である放送番組センターには、

横浜市からさまざまに協力をいただいている。横浜市民の利用があるのは嬉しいのですが、同時に全国から横浜に人を呼び寄せるという貢献もしたいのです」。

大家さんはもともとはシステム開発をする企業に勤めていた。そこで放送ライブラリーに転職し、今回のリニューアルを担当たという大家さんである。感慨ひとしおといったところだろう。

リニューアル終了後、その目は所蔵コンテンツを利用した横浜の見せ方に向いてい

放送コンテンツによる横浜、神奈川

映像アーカイブとして地元横浜市や神奈川県への配慮も欠かしてはいない。

1971年9月4日に朝日放送から放送された『天皇の世紀 黒船渡来』を筆頭に、80年代後半TVで放送された『ヨコハマはじめて物語』など横浜・神奈川の歴史や文化を読み解くのに役立つ番組を約300本保存・公開している。また、これらの番組に関連した企画展示も開催しているという。

すべての番組を視聴したわけではないが、と断りつつ、大家さんはこう語る。

「当然のことながら開港を扱った番組には頻繁に横浜が登場しています。元町や中華街を中心とした観光地としての横浜を取り上げた番組も多い。番組本数的にはNHKとTVKの番組が目立ちます。さまざまな局が横浜を取り上げています」。

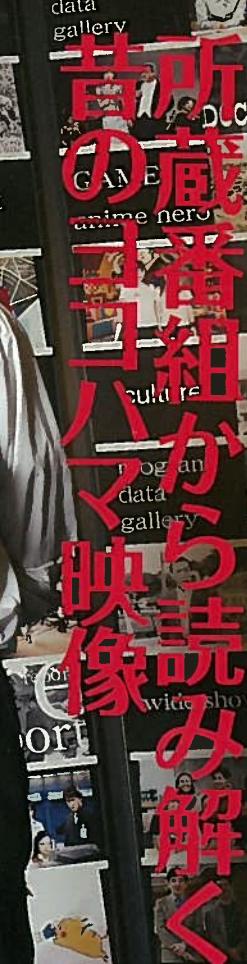
放送ライブラリーはかつて映画館で上映されていた『大毎ニュース』も収集した。

「収集した映像から横浜に関わる部分を

取りだして催しを開催してみたい」と大家さん。

リニューアル終了後、その目は所蔵コン

テンツを利用した横浜の見せ方に向いてい



エッセイスト

勝見洋一さん

開港の時代を凝縮した森鷗外作詞の横浜市歌



もつとも横浜らしいのは『横浜市歌』

北京では美術鑑定に携わり、パリではレストランガイドブックの覆面調査員。日本では、食はもちろん、美術、オーディオなどさまざまな分野のエッセイで名を馳せている勝見洋一さん。幅広い教養と体験を通じた独特のこだわりから一部では“平成の北大路魯山人”とも称される存在だ。横浜に移り住んで5年になる。そんな勝見さんに、もつとも横浜らしいものは何かとたずねてみたら、ややあって「横浜市歌」という答えが返ってきた。森鷗外が作詞、南能衛が作曲した横浜市歌。1909年（明治42）に開港50年記念大祝賀会で披露されてから、横浜市立の小・中・高校で歌われ続けている。2003年には横浜生まれの作曲家中村祐介がブルースバージョンを発表。今年は盆踊り調に編曲された「よこはまアラメヤ音頭」が誕生した。これほど市民の間に定着し100年もの間親しまれていた横浜市歌は全国どこを探してもない。

勝見さんがそんな「横浜市歌」の存在を知ったのは実はつい最近。なじみのタクシー運転手に「横浜市歌を知らないようじゃ、まだ浜つ子じやあないなあ」といわれたのがきっかけだった。

歴史を凝縮したすばらしいことばづかい

さつそく曲を聴いた勝見さんは森鷗外の凝縮されたことばづかいにいまさらながら感服した。

とくに、開港し大きく発展した港の昔を振り返って「むかし思へば苦屋の煙」と表現した部分。「僕は苦屋といへば、新古今和歌集にある藤原定家の『見渡せば花も紅葉もなかりけり 浦の蓬屋の秋の夕暮れ』を思い出す。苦屋の苦とは、菅や茅をあらぐ編み出でた。花も紅葉もないという引き算の歌。わびさびの心としてこの歌を取り上げる人もいるが、没落を象徴した歌なんですね。鷗外は『苦屋の煙』になにもない村だった横浜を象徴させた。

その直後に「今は百舟百千舟」。それゆけ日本といわんばかりに強烈な足し算で文明発展を思わせることばを続ける。

そして「果なく榮えて」と、未来への心境を盛り上げる。

横浜市歌には100年前に森鷗外が見た横浜の光景はかりか、明治の日本の精神的なものも見え隠れする。これほど横浜が凝縮されたものはない」と勝見さんが語る。

気取りない下町感覚でつかむ街の空気

話は変わって、勝見さんの子どもの頃の横浜といえば、銀座の人も一目置くような良い仕立屋のある街だったそうだ。

「近所のじいちゃんがよく横浜で仕立てズボンを自慢していた。当時は中国やインド出身の商人の仕立屋が中華街にも多くあつた。太もものラインが細いズボンは日本の仕立て屋は作れなかつたみたい」。とりとめなく、よどみなく豊富な話題を繰り出す勝見さんだが、美食家のイメージとは裏腹に、お気に入りのお店は意外と庶民的だ。寿司屋、小料理屋、居酒屋……。

共通するのはどの店も気取りがないこと。銀座・新橋で育った下町感覚のせいなのだろう。なじみの運転手さんから浜市歌を教えてもらったように、お店の人や、常連さんとの気軽な会話から街を読み解く話題を見つけ出している。

「横浜の人は精神的スタンスが確立されている。心にバスポートを持っていて、ますかり気に入った横浜を持ち上げる。最近では付き合いの長い東京の編集者から『ずいぶんと浜つ子になりましたね』と冷やかされるほどだそうだ。▼

SNSがきっかけで出版された本

単行本を出版するのは容易なことではない。テーマに沿って取材し、構成し、原稿を書き上げるにはプロでもエネルギーを要する。ましてやそれが素人ともなれば、たいへんだ。そもそも名前も実績もない人の本が売れるかどうかかも不透明だ。だから、単行本を出版する機会はそう簡単に得られるものではない。

その高いハードルをあっさりと越え出版された本がある。2010年3月に発刊された『麺食力』(株)アツプロード刊。著者は横浜市内の食品会社に勤める田中健介さん。田中さんはソーシャル・ネットワーキング・サイト(SNS)の力に支えられて幸せなデビューを果たした。SNSというのは、趣味や嗜好、居住地域、出身校、あるいは「友人の友人」といったつながりを通じて新たな人間関係を構築する場を提供する会員制のサービスのこと。田中さんが利用したのは、横浜の地域限定のSNS「ハマつちー」。地域限定といつても、知人からの紹介があれば誰でも参加できる。信頼できるネットワークづくりをと、登録の際に本名・住所・連絡先を記入する仕組みだ。9月2日現在の参加人数は3372人。

開港記念日に目標の150店を達成

2007年4月、「開港150周年までに市内の麺処150か所を踏破」をスローガンに「ハマつちー」の中でブログ「ハマの麺食い男」を始めた。人生最初のブログだつた。「ハマつちー」での田中さんのハンドルネームはALETTA1500GT。愛車の名前から取ったものだ。

このブログがヒットした。おすすめの店を教えてくれる人が回をかさねるごとに増えていった。この盛り上がりに「ハマつちー」のメンバーのひとりの編集者が注目した。そして、単行本にしてみてはどう話になつた。つまり、売れそうな話だという判断となつたのだ。

目標とした150店を達成したのは2009年6月2日。開港記念日だ。

「食べ歩きを通じて横浜の魅力を伝えたかった。麺食いですが、面食いではないですよ」と茶目っ気たっぷりに微笑む。掲載にあたつては、お店一軒一軒に手紙を書いて確認をとつた。大半の店主から手紙や電話でメニューの情報の訂正や追加情報が寄せられた。

そうしたプロセスの中で「お店との距離が縮まり、関係が深まるのを感じた」という。

「街に出る、食べる、交流する、仲間を増やす。それこそが地域経済発展の第一歩かもしれない」。そういうて田中さんは「街に出る、食べる、交流する、仲間を増やす。それこそが地域経済発展の第一歩かもしれない」。そういうて田中さんはジョッキをもう一杯追加した。

Text by Kimura Shizuka. Photo by Yabe Shiro.

田中健介さん



横浜限定のブロガーライセンス

大学短期大学部第二部商学科、神奈川大学第一経済学部貿易学科卒。介護福祉士を経て食品メーカー勤務。かながわ検定横浜ライセンス3級取得。日本ナポリタン学会会員

桜井飛鳥さん



八十日間世界一周に描かれた 横浜。ラドックスを読み解く

八十日間世界一周の横浜を地図上に再現

『八十日間世界一周』といえば19世紀フランスの作家ジュール・ヴエルヌの代表作。イギリス人資産家フリアース・フォッグが召使いのバス・パルトゥーを従え、世界を80日で一周しようと試みる波瀾万丈の冒険小説で新聞連載だった。刊行当時、トーマス・クック社主催による世界一周ツアーが行われるようになつていてこれが時代背景にある。

映画や舞台にもなつたこの物語には、横浜が登場する。1872（明治5）年10月にロンドンを出発した一行はスエズ、インド、香港、上海を経由して横浜にたどり着く。そして太平洋を横断しサンフランシスコへ向かう蒸気船に搭乗する。その数日間を横浜で過ごしているのだ。

ヴェルヌによって描かれた開港間もない横浜はいつたいどんな街だったのだろう。中学時代からのヴェルヌのファンで日本ユール・ヴエルヌ研究会の一員でもある桜井飛鳥さんは一行の横浜での足跡を地図上に再現することを試みた。きっかけは慶應義塾大学日吉キャンパスでの展示イベント。展示の目玉にしようとも、本と地図を片手に研究会メンバーとともに横浜港周辺を歩いた。

弁天から見えてきた新事実

桜井さんは東京生まれ。横浜は、両親に連れていくつも違う場所だった。子どもたちはクリスマスに横浜でプレゼントを買つてもらうのが恒例だった。しかし、横浜港周辺の土地勘はない。物語を思い浮かべながら知らない街を歩くのは発見と感動の連続だった。

主人に先行して横浜にたどり着いた召使いバス・パルトゥーが最初に歩いた日本人地区は「弁天」だった。現在も残るあの「弁天通」だ。

桜井さんは、そこで、現在の県立歴史博物館辺りにあったとされる洲干（しゅうかん）弁天社の歴史を刻んだプレートを読み、おかしなことに気づいた。物語の中では1872年にこの地にあつたはずの洲干弁天社が、実際は1869年（明治2）に、現在の羽衣町に移転し、厳島神社に改称していた。年が合わないので、原因はすぐに判明した。ジュール・ヴエルヌはエメ・アンベールの紀行文を参考にして『八十日間世界一周』を書いた。エメ・アンベールが来日したのは1863年（文久3）。つまり、9年前の紀行文をもとにヴェルヌは1872年往時の横

違い探しを通じ横浜の魅力感じる

桜井さんたちは約半年かけて現地調査した後、1863年から1872年にかけての横浜の地形や建造物の変化・差異が読めるようになった。この9年間で横浜港周辺は大きな変化を遂げたのだ。たとえば、1866年（慶応2）に豚小屋火事と呼ばれる大火事で閑内の3分の2近い範囲が焼失し、遊郭はなくなり横浜公園に。洲干弁天社周辺の水田は埋め立てられ住宅地に。港の先端に象の鼻が造られ、日本大通りも整備された。

展示は大成功だった。それどころか単行本化も決まり「ジュール・ヴエルヌが描いた横浜『八十日間世界一周』の世界」（慶應義塾大学教養研究センター選書刊）として結実した。桜井さんは地図と写真による街歩きガイドの章を執筆した。

今、桜井さんは、全国7大学によるプロジェクト「北仲スクール」（横浜文化創造都市スクール）で50年後の街を提案するワークショップに参加している。担当は、子安地区の工業地帯のフィールドワークだ。「調べれば調べるほどおもしろくなれる」と桜井さん。

現地調査のおもしろさに目覚めた桜井さんの次の発見が楽しみだ。▼

かなしみを マリンタワーに 置き来る

秋の日ふかく
きみ帰り来る

遠く去つてしまつたあなたが、
秋の日に私のもとに帰つて来るだらう。

二人で昇つたマリンタワーに、

一人で昇つて港を、海を眺めたのだから。
あなたは帰つて来る、寄せ返す波のように。

みずはら しおん 歌人。1959年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院修了。春田井建に師事し、以降歌集『ひあんか』『客人(まこと)』『くわんおん(観音)』『いろせ』『あかるたへ』、著作『阿弥の墨』『星の肉体』『京都つた物語』などを発表。現代歌人協会賞受賞、懸河梅花文学賞、河野褒子賞など多数受賞。
やべ しほ 写真家。1974年生まれ。奈良県出身。同志社女子大学短期大学部日本語日本文學科卒業。96年ドイツに渡り、日本語教師となる。帰国後、平地町に師事し、独立。渡辺貞夫らミュージシャンを多く撮影している。

「貴方の夢のスタート地点」をキヤッチ・フレーズにする“ザキ”的「クロスストリート」は今注目の多目的イベントスペースだ。青江三奈の伊勢佐木町ブルース歌碑のある四丁目イセザキモール駐車場の角地を占めるこの空間は3面ガラス貼り。開放的で中で何をしているかが見えておせる。ステージからは外にいる人の視線を感じることができ。つまり、路上に近い感覚を感じさせる。

3月にプレオープンしてから、ライブに出演したバンドは、8月末で100組を超えた。土日ライブ出演申し込みも日程調整が間に合わないほどという。その人気は、的確なキヤッチ・フレーズと開放的な雰囲気に負うところが多い違いない。

その影の立役者が植田淳さんだ。もちろんボランティア。幼少の頃からピアノやギターを弾き、音楽好きだったこともある。また、街を活性化したいという思いも強い。さらに、サラリーマン時代に販促を担当していたことも役立った。「クロスストリート」にかかわりだしてからというもの、カメラ屋の仕事をの合間にねつて、公募バンドの選考・ブッキングや広報などに忙しく駆け回る毎日だ。

4月に「横浜野音」を目標とする「クロスストリート」を実現にこぎ着けた。企画を提案したNPO法人と衝突もしたが、4ヶ月かけて説得し実現にこぎ着けた。

「横浜の音楽のメッカになりたい」という想いから、伊勢佐木町のストリートライブのルーツは古い。20年前、伊勢佐木モール5・6丁目で毎年数回、和太鼓を路上演奏していたことにさかのぼる。その後、地元のコンビニオーナーの鈴木孝行さん率いるビッグバンド「ハーバーライツオーケストラ」が登場、マンボやサルサなどキューバ音楽が人気を集め。それをきっかけに、観る・聴く!だけではなく、「みんなで踊ろう」という街の名物イベント「ラテンフェスタ」へと飛躍した。

そんな流れの中である日、NPO法人が伊勢佐木モール活性化を横浜市に提案し採用された。計画はミニシアターと現代アートを中心とした街づくり。商店街が望むようなものではなかった。しかし、市の助成条件は地元の同意。そんなチャンスはめったにあるものではない。植田さんは、地元商店による地域活性化部会を立ち上げ、街の意見の集約を試みた。

施工にあたっては、音楽空間として設計や音響機材にこだわった。だからミュージシャンからは「演奏していく気持ちが良い」と評判も上々だ。あるミュージシャンがライブ中に「ここはかつての横浜野音(横浜野外音楽堂)の代わりになり得る場所だ」といつてくれたと植田さんはうれしそうに語る。

明るい話題ばかりではない。残念な話

もある。当初ライブ中はガラス窓を開けていたが、途中から近隣からの苦情に配慮して閉めるようになつた。「路上イベントと同様に音を響かせたかったのですが」と植田さん。それでも、苦労の甲斐があり、確実に新しい人の動きができる始めている。バンドを自ら「ザキ」に来たことのない若者が足を運ぶようになった。アイドルグループの出演日には、男性ファンがクロスストリートを囲み、音楽で街を楽しくしたい。できれば天候に左右されないイベント・スペースがない。それが活性化部会の結論だった。企画を提案したNPO法人と衝突もしたが、4ヶ月かけて説得し実現にこぎ着けた。

Text by Kimura Shizuka. Photo by Yabe Shiro.

夢のスタート地点は開放的な空間

音楽で街を楽しくしたい

横浜の音楽のメッカになりたい

協同組合伊勢佐木町商店街副理事長 植田淳さん

CROSS STREET
isezaiki

CP

うえだ じゅん
協同組合伊勢佐木町商店街副理事長。株式会社カメラのウエダ取締役。1956年、横浜市生まれ。埼玉大学経済学部卒業後、日本光学工業（現在の株式会社ニコン）に12年間勤務。メガネ部門の販売促進等に携わる。その後、1991年より株式会社カメラのウエダに勤務。

（）

最高気温33・7度と真夏日を記録した8月末の午後。照りつける太陽を遮るかのように爽やかな歌声が横浜港に響き渡った。潮風に乗つて岸壁にも届いたのは、N・U・の歌声。ファンを乗せて初の船上ライブを披露したのだ。

40分間のクルーズを連続6本。大桟橋、赤レンガ、大観覧車と楽曲の舞台となつた横浜の名所を海から眺めながら演奏を聴くというちよつと洒落たクルージング。使用したのはケーワムシーコーポレーションが運航する定員32名の横浜港クルーザー「キヤブテンシナ」バ・カフエシップだつた。6便すべてを予約した熱狂的なファンもいた。

N・U・は、横浜ではちよいと知られたフォークデュオ。かながわドームシアターでは1000人ライヴを成功させ、伊勢佐木モールでのストリートライヴには700人を集めた実力派だ。

毎月開催しているワンマンライヴもすでに4年目を迎えた。ライヴハウスの床に椅子を並べ、横浜をモチーフにした曲をゆつたり聴くスタイルが人気で、お年寄りから若い人まで、幅広い世代の固定ファンで賑わう。

実はこのクルーズ、「前哨戦」という隠し味があった。

10月17日(日)、N・U・は自らの主催で野外コンサートを開く。タイトルは「ヨコハマアコースティックフェスティバル2010(以下アコフェス)」。場所は「象の鼻パーク開港の丘」。船上からはそこが一望できる。野外フェスはN・U・の長年の夢。それがまもなく実現する喜びと緊張感を味わうアコフェスの前哨戦としての位置付けだつたのだ。

アコフェスは昨年も実施した。ただしライブハウスで。アコフェス2009と称して4日間でのべ600人を動員した。だが、それはあくまでもクルーズと同様に前哨戦なのだとN・U・は強調する。

「横浜はN・U・を産んでくれた街。そのことに感謝するには野外コンサートでなくてはいけないです」。

そんな強いこだわりがあるから、ふたりはアコフェス2010の主催者として、企画から出演者交渉、当日の仕切りまで担当つもりだ。

「今はアコフェス2010のCDを買ってくれたおばあちゃんのこと。評価してくれたライヴハウスオーナーのこと……。そんな思い出を背景にUの宇田さんはいって、『今日は第一回ですが、街のお祭りの二つとして認識されるような恒例のイベントにしたい。そして、この街で知らない人がいるくらいのバンドになりたい。横浜を盛り上げていきますよ』。ふたりの意気は盛んだ。

Text by Kimura Shizuka. Photo by Wada Masaki.

真夏日の横浜港で船上ライヴ

この秋、初の野外フェス主催

地元横浜の人に味わつてもらえる歌を

N・U・の横浜への感謝の気持ちは強い。

「横浜は産みの親」と思つからだ。

走馬燈のように浮かぶ10年を振り返りながら、多くの人とのめぐり会いをNの庭瀬さんはジグソー・パズルにたとえる。

「どれかひとつピースが欠けていても、ここまでこれなかつたと思う」。

青葉区藤が丘の社員寮で部屋が隣同士だったこと。休日の朝からギターを弾く庭瀬さんの部屋に、宇田さんが苦情を言いついたこと。意気投合し、一緒に会社

を辞めて音楽活動をするようになつたこと。新潟配達員として雇つてくれた販売店の社長のこと。伊勢佐木モールで始めたストリートライヴ初日、立ち止まつて

聞いてくれた女子高生のこと。CDプレイヤーを持っていないのにCDを買ってくれたおばあちゃんのこと。評価してくれたライヴハウスオーナーのこと……。そん

な思い出を背景にUの宇田さんはいって、

「今はアコフェス2010のCDを買ってくれたおばあちゃんのこと。評価してくれたライヴハウスオーナーのこと……。そん

な思い出を背景にUの宇田さんはいって、

「今はアコフェス2010のCDを買ってくれたおばあちゃんのこと。評価してくれたライヴハウスオーナーのこと……。そん

な思い出を背景にUの宇田さんはいって、

「今はアコフェス2010のCDを買ってくれたおばあちゃんのこと。評価してくれたライヴハウスオーナーのこと……。そん

な思い出を背景にUの宇田さんはいって、

「今はアコフェス2010のCDを買ってくれたおばあちゃんのこと。評価してくれたライヴハウスオーナーのこと……。そん

フオーグデュオ
N・U・

夢なる横浜の野外フェス
N・U・

Who's Who In Yokohama



えぬ・ゆー 左から庭瀬幸一郎(G,Vo)、宇田晋也(G,Vo)。ともに大阪で生まれ、大卒後、就職して横浜で出会う。2000年にN.U.結成。会社を辞めストリートライヴを開始。等身大のラブソングと飾らないキャラクターで共感を呼ぶ。2003年横浜観光フォーラムの音楽分野で初の認定を受ける。10月17日(日)11時~16時「ヨコハマアコースティックフェスティバル2010」を象の鼻パーク開港の丘で開催。全7組が出演。入場無料。

協力：ケーワムシーコーポレーション
URL : <http://www.kmcy.com/>
TEL : 045-290-8377

横浜信用金庫
大通り公園「納涼ガーデンまつり」
横浜ジェリービーンズコンサート
2010年8月16日(月)～25日(水)
(水)に開催された「第2回大通り公園納涼ガーデンまつり」(主催・大通り公園納涼ガーデンまつり実行委員会)に協力し、横浜ジェリービーンズコンサートを開催しました。

横浜中央に設置されたステージでは毎日夕方からダンスやライブが繰り広げられ、地元の方や会社帰りのサラリーマンなどでぎわいました。横浜ジェリービーンズコンサートは、20日(金)、23日(月)、24日(火)に各30分×2ステージ(17:30～18:30)で行われ、横浜を中心に行なわれるボップバンドのN.U.とCapoockが会場を盛り上げました。集まつたお客様は、ビールを片手に自然の涼風に吹かれながら音楽を楽しんでいました。

語(仮)を初披露しました。23日(月)に登場したN.U.は、出来たばかりの新曲「横浜三塔物語」を初披露しました。午後(県庁)・クイーン(横浜税務)



大通り公園「納涼ガーデンまつり」
横浜ジェリービーンズコンサート
2010年8月16日(月)～25日(水)



横浜信用金庫では、横浜のマーケティングを実践する「横浜ジェリービーンズ俱楽部」事業を開催しています。同俱楽部は横浜の価値を高める各種の活動を行なうことと主目的としており、横浜観光プロモーションフォーラムによる認定事業となっています。ここでは、最近実施された同事業についてご紹介します。



横浜観光プロモーションフォーラム
横浜の観光・コンベンションに携わる約180の企業・団体・市民事業所からなる組織で、横浜への来訪者を増やすことを目的として活動しています。「横浜ルネサンス」を発行する「横浜ジェリービーンズ俱楽部」事業は、同フォーラムの認定事業となっています。

横浜ルネサンス No.16

2010年9月30日発行
発行 横浜信用金庫
〒231-8466 横浜市中区尾上町2-16-1
Tel:045-651-1451(代) Fax:045-651-2303
<http://www.yokoshin.co.jp>

編集 横浜信用金庫総合企画部
(横浜ジェリービーンズ俱楽部)
<http://www.yokoshin.co.jp/jbeans.html>
E-mail:jbeans@yokoshin.co.jp

制作・デザイン PortSide Station Co., Ltd.

© 横浜信用金庫 Printed in Japan 本誌記事の無断複数複写を禁じます
本誌に関するお問い合わせは、横浜信用金庫総合企画部:045-651-1451(代)まで

How To Taste Musics In Yokohama. 横浜の聴き方 第9回

『ふりむけばヨコハマ』 マルシア



『ふりむけばヨコハマ』(1989年)はマルシアのデビュー曲で、女心の未練を切々と歌っている。かなり感傷的な歌である。作詞はたきのえいじ、作曲は古賀政男に師事した猪俣公章で、分類するならこの曲は演歌に属することになるのだろう。横浜のご当地ソングにはポップスが多く、演歌は少数派である。

この曲を横浜の歌として成立させているのはサビの「ふりむけばヨコハマ」というフレーズの存在である。2番の歌詞の冒頭が「港離れる外国船」となっているが、サビの部分を除いて横浜を示唆するような表現はまったくない。もともと、これはご当地ソングには珍しいことではない。以前、「ご当地ソングの多くが『恋と涙と地名の連結』という平板な構造になつて

感傷的という意味では、第1回で取り上げたユーミンの『海を見ていた午後』も同じようく感傷的な作品である。どちらの曲も「わたし(私)」という一人称が使われていない点が共通しているが、ユーミンは「淋しい」とか「悲しい」といった感情表現をまったく使わず、感傷性を表現している。「ふりむけばヨコハマ」とは対照的な構成である。

人は「横浜を振り返る」時、どこに位置しているかを考えるのだろうか。東京方面から振り返るのか、横須賀 小田原方面から振り返るのか。あるいは山梨県のほうからか。その人の生まれ故郷によって違つてくるような気がするが、横浜生まれの筆者は、どこへ向かえばよいのかよくわからない(海へ向かう手もあるが泳げないので)。▼(中島久)

いる」とこの連載で述べた。「ふりむけばヨコハマ」もそのひとつである。

「ついて行きたい」「淋しい」「悲しすぎるわ」「恋しい」など、感情的な表現を多用してストレートでかなり濃厚な歌詞をマルシアがスタイルで歌い上げる。ただ、サビの「ふりむけばヨコハマ」のメロディが意外にも軽いので、聴き手としては逆にそこで一息つけて樂な感じを覚える。

Fm yokohama 25th ANNIVERSARY MORE MUSIC MORE LIVE!



N.U. 10th ANNIVERSARY

ジェリービーンズコンサート
7周年スペシャル

N.U.presents

YOKOHAMA ACOUSTIC FESTIVAL 2010

～Song for Smile～

Supported by The Yokohama Shinkin Bank

日時 2010年10月17日(日) 11時開演

会場 横浜・象の鼻パーク開港の丘

出演 N.U., 千綿偉功, 広沢タダシ, theSoul,
うたまろ, TAKUMA, 謙山実生

主催 YOKOHAMA ACOUSTIC FESTIVAL実行委員会

入場
無料

アコースティックの輝きを放つアーティストたちが横浜に集結。



千綿偉功



広沢タダシ



theSoul



うたまろ



TAKUMA



謙山実生